

復活された真の救い主を 述べ伝える

使徒言行録17章 22～34 節
2023年6月18日
松田 基子 師

聖書は、
『人生、どんなに栄耀栄華を極めたとしても、
いかなる称賛を集めたとしても、その人生の
土台が神様を知り、神様との生ける交わりを
持ち、神様の御心に従って生きなければ、
その人生は空しく滅び去って行く』
と教えています。

使徒パウロは熱心な信仰者でした。聖書の神
様を信じ、誰よりも厳しく自分を律して律法を守り、
伝統に従って生きていました。しかし、それは、

『神様との生ける交わりの無い、律法に
縛られた、命の無い信仰でした。』
結果的にその信仰は彼を追い詰め、

『キリスト者迫害に、道を求め』
ました。そのダマスコ途上、彼は光に打たれ、
天からの声を聞きました。それは迫害相手の頭
である、十字架に架かって死んだ、その弟子たち
が復活したと述べ伝えている、

『イエスと名乗る声』
でした。それは正しく復活し、生きて働き、呼びか
け、道を示して下さい、

『正真正銘のイエス・キリスト』
でした。

パウロはそこで初めて、生ける神様に出会った
のです。それによって彼は人生のたった一つの
目的が、何であるかを知りました。それは、

『自分の生命の与え主である神様を知り、
いかに自分がその神様の御心に背いた
人生を歩いて来たかを悔い改め、その罪深く
価値なき者の為に、御子イエス・キリストが
すべての罪を引き受けて身代わりの十字架
に架かり、滅ぶべき存在を贖って下さったこと
を信じて、キリストを愛し、キリストとの生ける
交わりを持ち、御心に従って生きること』

です。パウロはその恵のあまりの大きさに、身も
魂も全てをキリストに献げました。パウロにとって

その後の人生は一途に、イエス・キリストの御救い
を、地の果てまでも述べ伝えることでした。

パウロは使徒言行録 17 章 16 節で、
アテネにやって来ました。彼は同労者のシラスと
テモテをここで待つことになっていました。パウロ
がアテネに初めて足を踏み入れたのは、第二回
伝道旅行の時ですから、紀元 50 年～52 年の頃で
す。当時、地中海世界はすでに、ローマの支配
に移っていましたが、紀元前 146 年に、この地が
ローマに征服されるまで、アテネは古代ギリシャ
文化の中心地として哲学、文学、芸術の隆盛を誇
りました。紀元前 432 年に完成したアクロポリスの
丘に建てられた、パルテノン神殿は古代ギリシャの
最高建築と言われています。また、アテネと言え
ば有名なアテナイの学堂があった所です。
アテナイの学堂は、ソクラテスの死後、プラトンに
よって始まりました。ギリシャ時代は哲学の殿堂と
して誇っていました。21 節には

「すべてのアテネ人やそこに在留する
外国人は、何か新しいことを話したり、
聞いたりすることだけで、時を過ごして
いたのである」

とあります。そんなことが出来るのは、市民階級
の人々だけですが、議論好きで知識を誇る気風は
ローマ時代も変わらず、受け継がれていました。

ところで、パウロはそんなアテネの町を歩いて
みました。すると、あちらにもこちらにも偶像が溢
れているではありませんか。一説によりますと、当
時、少なくとも三千にも及ぶ偶像なるものがあつた
とされています。パウロは町に溢れる偶像に、詳
訳聖書では

「深く悲しんだ。怒りをかきたてられた」
と記されています。パウロの偉さは、

『間違った歩みをしている人々のために、
その行く末を心から案じて、この人たちの
滅びを見過ごしてはならない、という真剣な
思いがあったこと』

です。パウロは積極的にユダヤ人の会堂や
広場に出かけて行って、自分から話しかけて
います。広場は、アゴラと呼ばれ、人々の生活の

中心地でした。市場があり、多くの人々が集まり、主流の哲学が論じられました。

そこにはまた、放浪の哲学者や説教者が集まってきて、持論を述べるのです。パウロはそういう人々を相手に 18 節を見ますと、

「イエスと復活について、福音を告げ知らせていた」

とあります。しかし、それを聞いた人々は、よく理解できなかつたようです。パウロはユダヤ人とは全く価値観の違う世界に来て、イエス・キリストの福音を伝えることの難しさに直面させられていました。アテネの市民は哲学の殿堂としての歴史を誇り、

『自分達は知識人なのだ』

とのプライドがありました。確かに彼らは多くの知識を得ていました。知識欲は旺盛でした。何か新奇な価値あるものなら耳を傾けたいと思っていました。そこで人々は、その説が受け入れるに値するかどうか、パウロをアレオパゴスにある評議所に連れて行って、話の内容を吟味することにしました。

評議所は、道徳と宗教に関して特別の裁判権を有していました。パウロはこの機会を絶好のチャンスと捕えました。彼は評議所の真ん中に立って語り始めました。パウロはまず、まったくイエス・キリストを知らない人々に対して、どうしたら聴衆の心を捕えることが出来るかを考えています。相手にいきなり、

「あなたは間違っています」

と言って切り込んでいっても相手は心を閉ざすだけです。日本の一昔前の教会は、

「イエス・キリストにのみ真の救いがある」

ということを言いたいために、他宗教を批判して、

「あれは間違っている」

と否定する傾向がありました。それは反発を生みました。そこで、今日では他宗教を批判することなく、キリスト教の独自性を語っていくようになりました。パウロはそのことをよく弁えていました。

そこで彼は、

「アテネの皆さん、あらゆる点において

あなた方が、信仰のあついでである

ことをわたしは認めます」

と語りかけました。批判的に、

「あなた方の町は、偶像で溢れています。

間違っています」

とは言っていません。人間は自分の欠点を相手から指摘されて、それを素直に改めようとは思わないものです。信仰は**特に心からそうだと同意しなければ**、考えを変えることはありません。どうしたら相手に心を向けてもらえるのでしょうか。パウロは続けて語ります。

「道を歩きながら、あなたがたが拝む

いろいろなものを見てると、

『知られざる神に』

と刻まれている祭壇さえ見つけたからです。

それで、あなた方が知らずに拝んでいる

もの、それをわたしはお知らせしましょう」

と投げかけました。

アテネには、世界と自分自身の真の支配者を知らない人間の姿が表れていました。人間はみな、本能的に、**命に対する不安**を感じています。人は誰も自分の命を自分で保証することはできません。そこに不安があります。この不安は、地上のなにものをもってしても、解消されるものではありません。そのことがわからないために、自分の**不安**を少しでも**解消**してくれるものを考え、それを神として、次々に祭っていくのです。

太陽や月や多くの星々、海や山や川など大自然の力に畏怖の念を抱き、

『大自然を拝めば自分の存在が

守られるのではないか』

と思うのです。不安の解消を、

『物欲によって満たそう』

とすることも、多くの偶像が生まれる原因です。

パウロは、彼らのその**存在不安**の表れを、

「知られざる神に」

と刻まれている祭壇から察することが出来ました。

そこでパウロは、

「あなたがたが知らずに拝んでいるもの、

それをわたしはお知らせしましょう」

と話を核心に進めていきます。あなた方がまだ知らない、本当に知るべき神様、それは、

「世界とその中の万物とを造られた
神が、その方です」

と宣言しました。アテネの人々にとっては全く考えられないことでした。ギリシャの神々は人間の延長線上にあり、人間が考え出した神々です。

それに対して、
『真の神様とは、天地万物を創造し、それを維持し支配しておられる主なる神様です。そのお方は霊なるお方ですから、時間にも空間にも縛られることはありません。まして人間が手で作った神殿などに閉じ込めることが出来るような存在ではありません。』

そして大事なことは、
「人間の創造主であるということです。」
パウロは聴衆に
「すべての人に命と息とその他、全てのものを与えて下さるのはこの神様です」
と言って、26 節から神様の支配を語っています。詳訳聖書では、

「一つの共通の起源、一つの源泉、一つの血からあらゆる国の人々を造って、地の表面に住ませ、それぞれの割り当てられた時期と、それぞれの居住(定住地、国土、住居)の決まった境界を明確に定められたのです」

と言っています。

人間的に見るならば、地中海世界に於いてだけでも人々は肌の色が違い、力の強い国が弱い国を次々に征服してきた歴史です。人間が世界を動かしているとしたか考えられないアテネ人に対して、パウロは、

『永遠のスケールの中で神様が、万物と歴史を支配し、動かしておられる』

ことを語りました。そして彼らの心を神様に向けさせるために 27 節で、

「これは、人に神を求めさせるためであり、また、彼らが探し求めさえすれば、神を

見いだすことができるようにということなのです。実際、神はわたしたち一人一人から遠く離れてはおられません」

と訴えました。

パウロはここで、
『天地万物を創造された、神様は彼らに出会うことを待っておられ、呼び求めれば近くで、答えて下さる』

ということをお願いしたいのです。パウロはそこに共通する概念はないかと考え、当時有名なエピメニデスの詩を引用して、28 節に

「皆さんのうちのある詩人たちも、
『われらは神の中に生き、動き、存在する。』
『われらもその子孫である』
と言っていますよね」

と注意を引き寄せました。そして、それをキリスト流の意味に置き換えて、人間は神様に造られ、命を与えられているという意味で、

「わたしたちは神の子孫なのですから、
そもそも、神様とは造り主なのですから、
『人間の業や考えで作った像である筈がない』
と、真の神様の存在を示しました。そのうえで、パウロは、彼らが真の神様を知らなかった為に、
『神様も、憐れみをかけて下さった』
ことを告げています。

パウロは 30 節で

「神はこのような無知な時代を、大目に見て下さいましたが、今はどこにいる人でも皆悔い改めるようにと、命じておられます。それは、先にお選びになった一人の方によって、この世を正しく裁く日をお決めになったからです」とアテネの人に一番伝えたい核心に迫りました。

先にお選びになった一人の方こそ、イエス・キリストです。創造主なる神様は、御自身の業に責任をお持ちになるお方です。世界を創造され、麗しく成長させるために人間を創造し、管理者に立てて被造物を託されました。しかし人間は神様に繋がって聞き従うことをせず、人間中心の世界を作り、神様に背いたのです。結果

は当然裁かれなければなりません。しかし、人類を愛された神様は、人類を裁かれる前に、人類に**大きな憐れみ**をお与えになったのです。それは御自身と同じ思いで人類を愛しておられる、

『**神の御子**』を人の世に送り、人類の罪を贖わせ、人類に救いの道を開くことでした。神様はまず救いの道を与えて、その上で人類を裁くことをお決めになったのです。十字架に架かられたイエス様こそ、神様がお定めになった**真の救い主**、また、**真の審判者**であることは、**神様が**イエス様を十字架の死から**三日目に死人の中から復活**させられたことによって**神様が証明**なさいました。

神様がイエス・キリストによって、すべてを整えられた今、**人間がなすべき**ただ一つのことは、
『**神様の前に背きの罪を認めて、心から悔い改め、イエス・キリストを信じて、キリストに自分の存在を賭けて従い、裁きの日をキリストに委ね、御国を目指して歩む**』
ことです。

パウロは心を尽くし、知恵を尽くしてこれらのことを語りましたが、アテネの市民にとって、
『**死者の復活**』
は、自分たちの考えに合わない、受け入れられない言葉でした。あのソクラテスも**靈魂不滅**を信じ、毅然として毒杯を仰いだと言われます。アテネ人にとって**靈魂不滅**こそが重要なことであり、体の甦りなど興味もなく、

『**ある者は嘲笑い**』
とあるように、彼らにとっては耳を傾ける価値なき言葉に聞こえたのでした。それでも心を開いて信仰を受け入れた少数の人々がいました。パウロのアテネ伝道は失敗だったという学者がいますが、伝道に失敗はありません。パウロは与えられた機会をしっかりと捕え、心を尽くし知恵を尽くし、聖霊の助けを求めて語ったのです。パウロはその時の最善を尽くし、聖霊も働いて下さったのです。しかしそれを聞いた人間の心が世の知識を誇り、へりくだることなく、自分の罪に気付こうともせず、心を頑なにしました。

人の頑なな心は、人間の力で変えられるものではありません。後は神様にお任せすれば良いのです。さて、私達が置かれている今日の状況も、まさにアテネです。イエス・キリストの十字架、復活、審判をいきなり語り出しても受け入れられないでしょう。先ず**大切なことは、私たち自身がその信仰に**生きているかどうか、**喜び生かされているかどうか**が問題です。日々の生活の中で復活のイエス様に出会っていますか。御言葉から、祈りから、イエス様が復活し、今も生きて働いて下さっていることを実感していますか。その恵を教会員同士で、あのエマオの途上の復活のイエス様に出会った弟子たちのように、

『**心が燃えたではないか……**』
と証し合っていますか。家族の中の**信仰者同士**、**イエス様が生きておられる喜び**を語り合っていますか。

喜びは、外に溢れるものです。何よりも**復活のキリストと出会っている喜び**が、内に無ければ語り出すことはできません。パウロと私たちとはそこが違うのです。私たちも伝道できるようになるために、福音の中身である人間の罪、イエス・キリストの十字架、復活、審判を述べ伝えて行くために、そこから始めてまいりましょう。

お祈り致します。
憐れみ深い天の父なる神様、神様の御愛の大きさは小さな私たちには計り難いものです。私たち罪人を救うために御子イエス・キリストを十字架に架けて贖い、復活させ、審判の日をお定めになりました。イエス様は復活し、今生きて、なお多くの人々を救おうと私たちをお用いになります。私たち自身が生けるイエス様との愛の交わりに生かされて、主の約束を語って行く者とならせて下さい。

救い主イエス・キリストの御名によって
お祈り致します。 アーメン